

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)

営農インフォ

水稲

◆収穫
刈り取り時期の目安は、もみに青みが10〜15%残っている頃である(品種ごとの収穫目安は表1参照)。刈り遅れは胴割れ米の発生や食味、品質の低下を招くので、適期を外さないようにする。

収穫は少し早めの方が米も美味しく品質も良い。特にヒノヒカリは刈り遅れると茶葉が増えるので、注意する。

表1.品種別刈り取り適期(目安)

品 種	刈り取り適期(目安)
きぬむすめ	10月 2〜7日
ヒノヒカリ	10月13〜18日
モチミノリ	10月 8〜13日

※6/10に田植えした標準的な生育の場合。
※一般的に田植えが5日遅れると出穂が2日遅れ、田植えを5日早くすると出穂は2日早くなる。

◆乾燥

コンバイン収穫の場合は乾燥させずに脱穀をするため、もみを変質しやすい。そのため、脱穀後4時間以内に乾燥機に入れて送風する。バインダー刈りして乾燥の場合10日〜2週間程度干すが、あまり長く干しすぎると胴割れ米が発生するので注意する。過乾燥にならないよう、もみ水分15%を目標に乾燥させる。

◆こまつな

10月中旬に入ったら生育日数が長くなるので1回のは種面積は多めにする。また、低温伸長性の良い品種を選ぶ。

◆病害虫防除

コナガ、ヨトウムシ類の発生が見られる場合は発生初期に表4の薬剤等を散布する。

秋の降雨が連続する時期には白さび病の発生が多くなる。は種量は適正にし、排水を良好にして過湿を避ける。発生初期には表4の薬剤を散布する。

◆しゅんぎく

◆病害虫防除

採種当年の種子を使用すると、炭そ病が発生する危険性があるので、なるべく前年に採種された種子を使う。また、多湿な条件下ではべと病が発生しやすいため、排水を良好にして過湿を避け、発生初期には表5の薬剤で予防する。

10月中旬以降、菌核病により、立ち枯れ症状や下葉のずるけが発生することがある。菌のまん延を防ぐため、菌核病を発生した株はほ場外に持ち出す。



◆種もみの採種
病害虫の多発したほ場では採種しないようにする。特に、近年、内えい褐変病やもみ枯細菌病の発生ほ場が増えているので、積極的に種子更新を行なうようにする。

野菜

◆さいとも(石川早生)

◆種いもの掘り取り期
種いもの掘り取り適期は10月中旬であり、晴天が続く、土壌がよく乾燥している時に掘り上げる。早掘りは、腐敗が多くなるので避ける。

◆種いも選抜

豊産系の優良な株を選ぶ(子いもは丸型、そろいが良い、肥大が早い、無病のもの)。また、30g以上でできるだけ大きいものを選ぶと良い。

◆貯蔵前処理

乾燥貯蔵は、風通しのよい日陰で15日以上かけて乾燥させる。貯蔵は納屋などの温度変化の少ない場所(5℃以下にならない暗所)で貯蔵する。

表2.たまねぎの病害防除に登録がある農薬

病害名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
苗立枯病	オーソサイド水和剤80	600倍	収穫前日まで/5回以内	100〜300ℓ/10a
灰色腐敗病	ベンレート水和剤	2000〜3000倍	収穫前日まで/6回以内	100〜300ℓ/10a

表3.キャベツの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
アオムシ、コナガ、ヨトウムシ、ハイマダラノメイガ	アフーム乳剤	1000〜2000倍	収穫前日まで/3回以内	100〜300ℓ/10a
ヨトウムシ、ハイマダラノメイガ、タマナギンウバ	トルネードフロアブル	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100〜300ℓ/10a
アオムシ、アブラムシ類、ハイマダラノメイガ、キスジノミハムシ	エルサン乳剤	1000〜2000倍	収穫14日前まで/2回以内	100〜300ℓ/10a

表4.こまつなの病害虫防除に登録がある農薬

病害虫名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
コナガ	カスケード乳剤	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100〜300ℓ/10a
コナガ、ヨトウムシ類	ズビエース顆粒水和剤	2500〜5000倍	収穫14日前まで/2回以内	100〜300ℓ/10a
ヨトウムシ類	マトリックフロアブル	2000倍	収穫14日前まで/3回以内	100〜300ℓ/10a
コナガ	アフーム乳剤	2000倍	収穫3日前まで/2回以内	100〜300ℓ/10a
コナガ	コテツフロアブル	2000倍	収穫3日前まで/1回	100〜300ℓ/10a
白さび病	ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで/3回以内	100〜300ℓ/10a

※カスケード乳剤、マトリックフロアブル、ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。
※ズビエース顆粒水和剤は、非結球あぶらな科葉菜類(みずな、長崎はくさいを除く)で登録がある。

表5.しゅんぎくの病害防除に登録がある農薬

病害名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
べと病	Zボルドー	500倍	-/-	100〜300ℓ/10a

※Zボルドーは、野菜類で登録がある。

果樹

◆みかん

◆秋肥の施用

秋肥は着果による養分消費を補い、干ばつなどの影響で低下した樹勢を回復させるために施用する。地温の低下に伴い根の吸収力が低下するため、年内に吸収されるように早生温州では10月下旬に、普通温州では11月上旬に10a当たり燐加安S403を60kg施用する。施用が早すぎると着色が遅れたり、浮皮が増えるので注意する。

◆浮皮防止

なお、着果量の少ない園では、施用時期を少し遅くし、施用量を少なめとする。

気温が高く、曇雨天が続くと浮皮が発生しやすくなる。浮皮の軽減対策としてクレフノン(100倍/収穫1か月前から収穫直前までの間に1回散布)を、果皮が4〜5分着色した頃を目安に散布する。ただし、収穫直前の散布は果実が汚れるので注意する。

◆病害虫防除

果実着色が遅れ、色ぼけの原因となるミカンハダニの防除に、オマイト水和剤(750倍/収穫7日前まで/2回以内)、または、コロマイト水和剤(20

たまねぎ

◆育苗管理

育苗中は、苗立枯病や灰色腐敗病が発生する可能性がある。予防的に表2の薬剤等で防除を行ない、健全な苗を育てる。

◆定植

早生品種は10月下旬から定植期に入るが、早植えは収量減につながるため避け、育苗日数が40〜45日前後の苗を植え付ける。ただし、大苗になると抽苔する危険性が高くなるので、葉数3枚で茎の径が4mm位の苗を植え付ける。定植直後にかん水し、乾燥が激しい場合は、うね間に走り水をする。

キャベツ

◆追肥

初期生育を良くするため、活着後の追肥は早めに施す。

◆病害虫防除

アオムシ、コナガ、ヨトウムシ類の発生が増える時期であり、幼虫は成長すると薬剤が効きにくくなるので、初期防除を徹底する。また、ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)の発生に注意する。育苗(生育初期)に新葉を食害し、芯にもぐると薬剤が効きにくくなる。発生を認めたら、直ちに表3の薬剤等を散布する。

いちじく

◆収穫

気温が低くなると収穫適期になるまで時間がかかる。そのため、着色だけで収穫適期を判断せず、果実が適度に柔らかくなっているかどうかも確認して収穫する。

◆もも

◆病害虫防除

せん孔細菌病の病原菌は感染した新梢の組織内で越冬し、翌年の感染源となる。10月上旬〜中旬にICボルドー412(30〜50倍/1〜1)を2週間程度期間をあけて2回散布する。ただし、高温時の散布では、薬害が発生する場合があるので使用しないこと。



◆元肥の施用

10月下旬〜11月中旬が元肥の施用時期で、10a当たりみかん配合を100kg施用する。時期が遅れると地温が低下し、肥料の吸収が悪くなる。さらに元肥の吸収率を高めるため、施用後に十分かん水する。

◆土壌改良

10月下旬から1月にかけて深さ、直径とも50cm程度の穴を掘り、完熟堆肥と土を混ぜ合わせて埋め戻す。断根を最小限に抑えるため、5年程度かけて樹の周りを一巡するようにして行なう。また、排水不良園では暗渠排水などを整備する。

◆かき

◆秋肥の施用

樹勢回復や来年の花芽充実のため、10月中旬〜11月中旬に10a当たり燐加安S403を30〜40kg施用する。

◆病害虫防除

カメムシ類の被害が多い園地では、園内の観察をきめ細かく行ない、カメムシ類の発生を見かけたら、スカウトフロアブル(1500倍/収穫7日前まで/5回以内)、または、アディオン乳剤(2000〜3000倍/収穫7日前まで/5回以内)を散布する。

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。